現代イタリア演劇の研究〜ダリオ・フォーのびっくり箱 2001・2002

高田和文
文化政策学部国際文化学科

本稿は平成十三年度、十四年度に学長特別研究事業として行なわれた「現代イタリア演劇の研究」に関する報告である。事業の目的は、イタリアのノーベル賞劇作家ダリオ・フォーの作品を、実際の舞台上演を通して本学学生及び一般市民に紹介することにあった。上演されたのは、フォーの初期の一幕喜劇『泥棒もたまには役に立つ』（十三年度）と代表的な政治風刺劇『アナーキストの事故死』（十四年度）で、いずれも日本では未公開の作品である。上演は本学講堂において行なわれたが、日本ではまだあまり知られていない劇作家であるにもかかわらず多数の観客が来場し、たいへん好評であった。また、舞台上演と並行してフォーの演劇活動を紹介する写真パネル展、イタリア独自の演技の方法を用いたワークショップを実施した。ワークショップには浜松で活動する劇団の俳優や高校の演劇部員が参加し、地域の演劇関係者との直接的な交流を図ることができた。

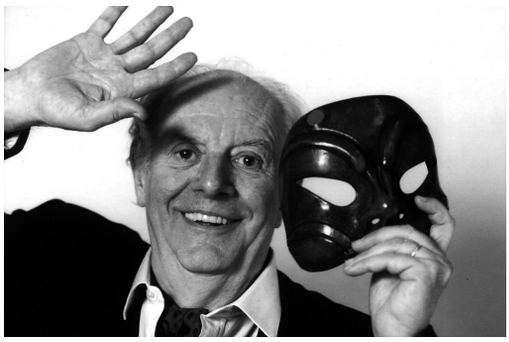
はじめに

本稿は平成十三年度及び平成十四年度の静岡文化芸術大学学長特別研究費により行なわれた研究事業「現代イタリア演劇の研究」に関する報告である。研究事業に携わったのは高田の他、文化政策学部芸術文化学科教授扇田昭彦（平成十三、十四年度）、デザイン学部生産造形学科助教授佐井国夫（平成十三年度）、文化政策学部芸術文化学科教授伊藤裕夫（平成十四年度）であった。

一　研究の背景と目的

この研究事業の主たる目的は、イタリアの劇作家ダリオ・フォーの作品を、実際の舞台上演を通して本学学生及び広く一般市民に紹介することにあった。また、舞台上演と並行して、平成十三年度にはフォーの舞台活動に関する写真パネル展、十四年度にはミラノ在住の演出家井田邦明氏による演技ワークショップを行ない、フォー及び現代イタリア演劇に対する一般の人々の理解を深めることとした。

劇作家であり、俳優・演出家でもあるダリオ・フォーは、現代イタリアを代表する演劇人で、その作品は全世界五十カ国以上で翻訳上演されている。世界各国における上演の高い人気と民衆劇の手法を取り入れた独自の作劇法が評価され、一九九七年にはノーベル文学賞を受賞した。



ダリオ・フォー（写真提供 CTFR）

イタリア国内は言うまでもなく、東欧、北欧を含めたヨーロッパ、北米、南米などでは翻訳上演も多く、またフォー自身が自ら公演やセミナーを行なっていることもあって、彼の名声は広く知られている。しかし、日本においては、一九八〇年代の劇団民藝や黒テントによる

上演、九〇年代のドラマスタジオによる上演によっていくつかの作品が紹介されているのみで、残念ながらその知名度はまだ低いと言わざるを得ない(1)。もっとも、韓国、中国などアジア諸国でも似たような事情のようである。

参考までに、これまでに日本で翻訳上演されたフォーの作品は以下の通りである(2)。

『虎物語』(劇団黒テント、八三年)
『払えないの？　払わないのよ！』(劇団民藝、八四年。〇一年に再演)
『クラクションを吹き鳴らせ』(同、八七年)
『天使たちがくれた夢は・・・？』(ドラマスタジオ、九四年。九八年に再演)
『白と黒の二丁拳銃』(同、九五年)
『盗みはほどほどに』(同、九六年)
『女がひとり』『よくある話』(世田谷パブリックシアター、九八年)
『泥棒もたまには役に立つ』(シアターX、〇一年)
『開かれたカップル』(同、〇一年)
『アナーキストの事故死』(同、〇二年)

このうち、今回の研究事業として上演されたのは、〇一年の『泥棒もたまには役に立つ』と〇二年の『アナーキストの事故死』である。これらはもともと東京・両国のシアターX（カイ）において上演されたものであるが、それを研究事業として本学講堂で公開することとした。なお、シアターXにおいては、〇一年に『泥棒も・・・』と併せてやはり一幕の『開かれたカップル』を上演している。

まず述べておかなければならないのは、日本で翻訳上演された作品の数は、西ヨーロッパ諸国はもとより、東欧、北欧、アメリカ、南米などの国におけるそれと比べると著しく少ないという点である(3)。日本でフォーの名前を知っているのは、おそらくごく一部の研究者や演劇関係者に限られるだろう。ただし、アジア諸国、例えば韓国や中国における上演は日本よりさらに少ないことも付け加えておく。

さて、日本で上演されたフォーの作品を一瞥すると、いくつかのタイプに分類することができる。一つは、『払えないの?・・・』『クラクション・・・』など、現代の政治問題や社会問題を扱った作品である。もう一つは、『天使たち・・・』『白と黒の・・・』『盗みは・・・』など、五〇年代から六〇年代にかけての、比較的オーソドックスな喜劇のスタイルを取った作品。三つめは、『虎物語』、『女がひとり』、『よくある話』など、モノローグ劇つまり「語り」の形式を用いた作品である。それぞれがフォーの演劇活動の特徴を示す作品群であり、日本での上演は数こそ少ないものの、フォーの演劇の多様な側面を紹介する形で行なわれてきたと言える。

しかし、フォーの演劇活動の最初の時期、すなわち五〇年代初頭に彼が軽演劇の舞台で活躍していた頃の一幕喜劇や、フォーが最も先鋭的な形で政治劇を展開していた七〇年代初頭の作品は、今回の公演が行なわれるまでは上演される機会がなかった。

フォーの作品の全体像の紹介が困難な理由として、一つにはその作品のスタイルがきわめて多様であること、また、実際の舞台上演においてはアドリブ的な要素が強く、「戯曲」としてテキストを確定し難いものが多いこと、さらには作品が度重なる再演を通して常に進化・

発展し、変化していったものが多いことが挙げられる。典型的な例が、彼の代表作とされる『ミステーロ・ブッフォ』である。これは中世の民衆劇の再現を試みたモノローグ劇だが、六九年の初演以来再演を重ね、最近では〇一年から〇二年のシーズンにフォーの演劇活動五十周年を記念する公演の演目の一つとして上演された。タイトルは同じでも内容は現代の政治風刺となっており、初演当時のものとは大きく異なっている(4)。

今回の公演には、まず右に述べたような日本でのフォー作品の上演における欠落部分を補おうとの意図があった。さらには、〇一年の一幕喜劇二本の上演には、五〇年代の初期の作品と八〇年代の円熟期のそれとの作劇上の相違を実際の舞台上演を通じて浮き彫りにしようとの狙いもあった。

二　舞台公演と上演作品の概要

今回の研究事業で行なわれた舞台公演の概要は以下の通りである。

平成十三年度
日時　二〇〇一年九月二九日（土）午後二時開演
場所　静岡文化芸術大学講堂
第一部　イタリア演劇公開ワークショップ（井田邦明）
第二部　『泥棒もたまには役に立つ』（ダリオ・フォー作、高田和文訳、井田邦明演出、シアターX製作）
第三部　アフタートーク（井田邦明、扇田昭彦、高田和文）

平成十四年度
日時　二〇〇二年一〇月五日（土）午後二時開演
場所　静岡文化芸術大学講堂
『アナーキストの事故死』（ダリオ・フォー作、高田和文訳、井田邦明演出、シアターX製作）

公演はいずれも無料で学生及び一般市民に公開された。〇一年には作品上演に先立って、演出を担当したミラノ在住の演出家井田邦明氏による公開ワークショップが実施された。また、上演後には作品解説などを含めたアフタートークが行なわれた。

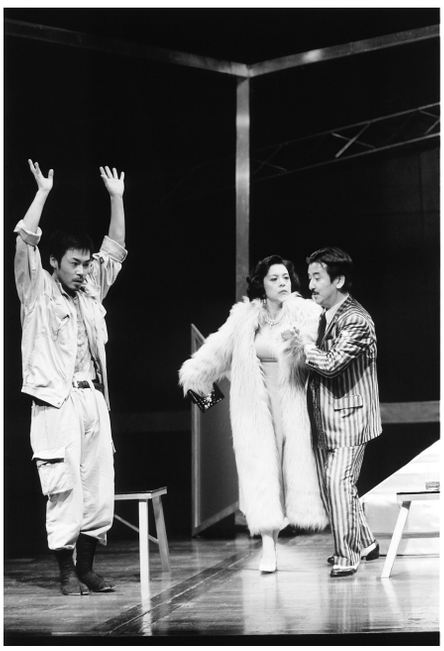
上演された二つの作品の概要を以下に述べておく。

『泥棒もたまには役に立つ』はイタリアで五八年に初演された一幕喜劇で、当時軽演劇の舞台で作家兼俳優として活動していたフォーの最も初期の作品の一つである。一見すると単純な通俗喜劇に見えながら、その劇的な仕掛けは非常に巧妙で、コンメディア・デッラルテの伝統を受け継ぐイタリアの喜劇性が強く反映されている。フォーの作劇の手腕を十分に感じさせる作品と言える。また、中流市民階級と下層の労働者階級の生活や意識を対比的に描くなど、後のフォーの作品に顕著となる政治的・社会的な視点もうかがえる。

あらすじは以下の通りである。

高級マンションの一室。泥棒が部屋を物色している。やがて家の主人が愛人とともに帰宅。泥棒は大きな柱時計の中に隠れる。泥棒の妻からかかってきた電話を受けて、家の主人は妻が探偵に浮気調査を依頼したものと思い込む。しばらくして、時計の振り子にぶつかった泥

棒がたまらず飛び出してくるが、主人は泥棒を探偵と勘違いする。そこへ妻のアンナが不意に帰宅。主人は泥棒と愛人を夫婦ということにしてその場をとりつくろう。ところがそこへアンナの愛人アントニオが登場。あわてた彼女は彼を柱時計の中に隠すが、やがて振り子にぶつかって飛び出してくる。彼は実は主人の浮気相手の夫であり、自分の妻がその場にいることに驚く。四人は互いに浮気の事実を知られまいと必死になるが、一瞬の隙をついて泥棒が部屋の明りを消し、逃走する。四人がそれを追いかけ、取り押さえるが、電気をつけてよく見るとそれは家に忍び込んだ別の泥棒であることが分かる。



シアターＸ製作『泥棒もたまには役に立つ』の舞台（© 宮内勝）

一幕の短い作品だが、巧みに計算された喜劇的仕掛けとギャグがちりばめられた、いわゆる「ウェルメイド・プレイ」の典型と言ってよい。後に過激な政治風刺劇を展開するフォーが、初期の活動において大衆喜劇の作劇法の技術を徹底的に磨いていた様子がうかがえる。フォーの演劇活動の全体像を把握するうえで、この時期の作品はもっと注目されてよい[5]。

また、シアターＸで上演されたもう一つの一幕喜劇『開かれたカップル』（イタリア初演は八三年）と比較すると、フォーの演劇活動の軌跡と手法の変化がよく分かる。『開かれた・・・』では、『ミステーロ・ブッフォ』に代表されるモノローグや観客への語りかけが多用されているのに対し、『泥棒も・・・』ではそのような手法は用いられていない。舞台上の行動はそれ自体で完結した形となっており、いちおうはオーソドックスな近代リアリズムの枠内に収まっている。一方、『開かれた・・・』では、主人公の女性アントニアがしばしば舞台の演技空間から抜け出したり、観客に語りかけたりする。しかも、実際の上演ではアドリブも相当加わるはずである。ちょうど四半世紀の時を隔てたこれら二作品を同時に上演することで、フォーの劇の構造上の変化がはっきりとした形で捉えられたのではないかと思う。

一方、『アナーキストの事故死』はイタリアで七〇年に初演された作品で、フォーが最も先鋭的な活動を展開していた時期の代表作である。当時のフォーはイタリアの政治問題に積極的に関わり、過激な政治劇を次々に発表していた。その内容には警察当局が常に神経を尖らせ、フォー自身が公演中に逮捕されて一時拘留されるといった事件もあった。また、ともに演劇活動を行なっていた夫人のフランカ・ラーメが極右グループの暴行を受けたこともある。

劇のあらすじは以下の通りである。

警察署の一室。一人の容疑者が警部の尋問を受けている。彼は変装マニアで、さまざまな人物になりすまして詐欺を働いていたという。尋問が終わって警部が出て行くと、変装狂はだれもいない部屋にこっそり戻って来て、引出しの書類をかき回し、あれこれ情報を得る。また、かかってきた電話に出て警部になりすまし、適当に相づちを打って事情を聞き出す。次いで署内の別の部屋。変装狂はアナーキストの死亡事件に関する再調査のために署を訪れた裁判官に扮している。爆弾事件の容疑者として尋問を受けていたアナーキストが警察署の窓から転落して不審な死を遂げた事件で、警察発表では自殺とのことだったが、変装狂が扮する裁判官が当事者の警部と署長を問い詰めてゆくと、次々に矛盾点が出てくる。

署長と警部は何とか辻褄を合わせようと試みるが、結局、アナーキストの死は自殺でも事故でもなく、警察による意図的殺害だったという疑惑が強まる。そこへ、事件を取材している女性ジャーナリストが登場。変装狂は今度は科学捜査局長に扮し、署長と警部に警察の立場を守ることを約束する。しかし、女性ジャーナリストの鋭い質問と変装狂の逆説的な論理によって、警察側の主張の矛盾がますます露呈する結果となる。さらには、警察のみならず軍や政府が事件に関与しており、国家ぐるみの陰謀であった事実が明らかにされる。

この作品の背景にあるのは、六九年十二月にミラノで起こったフォンターナ広場事件（イタリア農業銀行爆破事件）と、容疑者として逮捕された極左活動家トゥリオ・ピネッリのミラノ警察署内での不審な死亡事件である。当時のイタリアは、六九年秋に頂点に達した労働闘争とそれに呼応した学生運動が徐々に失速する一方、極左及び極右のテロの脅威が現実になりつつあるという騒然とした状況にあった。十六名もの死者を出したファオンターナ広場事件は、その後七〇年代に相次ぐ爆弾テロ事件の発端となったが、事件当初、警察は一連の爆弾テロを左翼の犯行と断定、大量の活動家を検挙した。しかし、その後の検証ではむしろ、極右組織が直接の実行犯であり、背後で軍や政府、さらには米国ＣＩＡさえもが関与していた疑いが生じた。また、ピネッリの死も当初は自殺と発表されたが、調査の結果、警察による意図的殺害の疑惑が強まった。

「自殺」「事故」「殺害」「急病」といった仮説がどれも立証されないまま、ピネッリの尋問を担当していた警視が殺害され、さらには拘留中の極右の実行犯が逃亡するなど、不審な事件が相次いだ。この結

『アナーキストの事故死』を演じるフォー（写真提供 CTFR）

シアターＸ製作『アナーキストの事故死』の舞台（© 宮内勝）

果、裁判は二転三転し、一時は迷宮入りかと思われた。ところが、冷戦構造終結後の九〇年代になって再び捜査が開始され、新たな資料と供述から極右活動家三名が容疑者として浮上、検察側は起訴に踏み切った。その後、〇一年に一審で三名に終身刑が求刑されるが、裁判は今なお継続中である(6)。

この事件は、実は日本とも非常に深い関わりがある。というのは、第二次裁判で終身刑を求刑されたかつての極右活動家の一人デルフォ・ゾルジが、七〇年代に来日、その後日本国籍を取得して現在日本に在住しているからである。彼は有名ブランド品の輸入業者としてビジネスで成功を収め、巨額の富を築いたという。イタリア政府は日本政府に対し公式にゾルジの身柄引き渡しを要請しているが、日本国籍を有することなどを理由に今のところ実現していない。身柄引き渡しに消極的な日本政府に対し、フォーと事件の被害者遺族代表は〇〇年三月、小渕元総理宛に手紙を送り、積極的対応を求めている(7)。

さて、フォーは事件発生後わずか一年にしてその政治的・歴史的意味を問い、政府・警察の姿勢に対して批判的メッセージを発したわけだが、その後の捜査で「国家ぐるみの陰謀」という彼の仮説がかなりの程度裏付けられる結果となった。事件の全容は三十年以上を経てなお解明されておらず、現在も裁判が継続中であるとはいえ、いち早く事件の本質的構図を見抜いたその先見性にあらためて驚かされる。ただ、フォーのこの作品は単に左翼側の主張を訴えるだけのプロパガンダ劇ではない。警察署内に忍び込んだ変装マニアを主人公とすることで、変装やギャグ、パロディーといった仕掛けをふんだんに盛り込み、明確な政治的主題を持ちながらも優れた喜劇に仕上がっている。この作品が世界各国で翻訳上演されて好評を博しているのも、単なる政治劇の枠を超えた質の高い喜劇になっているからだろう。

今回の上演はこの作品の本邦初演となった。イタリアはもとより、イギリスなどでも何度となく再演され、フォーの政治風刺劇の代表作とされる『アナーキスト・・・』が日本で翻訳上演された意義は大きい。また、今回の上演はくしくもゾルジの身柄引き渡し問題により日本でもフォンターナ広場事件やその後の裁判の経緯が報道されるようになった時期と重なった。このことでフォーの作品の持つ同時代性があらためて浮き彫りになったと言える。

井田演出は、フォーの提起した問題を同時代の、さらには現代の日本のものであることを示すためにいくつかの工夫をしている。まず、フォンターナ事件とイタリアのテロ問題に取材したＮＨＫの特別番組「ＮＨＫスペシャル」の一部を劇の冒頭で上映し、当時のイタリアの状況を日本の観客に分かりやすく伝えるという方法を取った。また、終幕でゾルジの身柄引き渡しを訴えるフォーの小渕元総理宛の手紙をテロップで流すことにより、劇中の事件が日本の観客にとって一挙に現実味を帯びることとなった。フォーの演劇の魅力を一言で言うなら、古典的な喜劇の文法を踏まえながらも、現代の政治的・社会的テーマを取り上げている点にあるが、井田演出はこうした彼の演劇の本質を捉えたものと言ってよい。また、フォーの提起した問題意識を共有しようとの意図は、日本の政治・社会状況に関するアドリブの台詞を随所に挿入したことにもうかがえる。そうした意図が実際に観客にどれだけ伝わったかは別として、このような演出の方法はこれまでの日本におけるフォーの上演には見られなかったものである。フォーの活動をその初期から現地イタリアで直接目にし、個人的にも彼と親交を結んでいた井田氏ならではの視点として評価したい。

三　写真パネル展と演技ワークショップ

本研究事業においては、ダリオ・フォーの作品の舞台上演と並行して、ダリオ・フォーの演劇活動を紹介するための写真パネル展及び演技ワークショップを行なった。

写真パネル展の概要は以下の通りである。

日時　二〇〇一年九月二九日（土）から十月六日（金）まで
場所　静岡文化芸術大学西館ギャラリー
展示内容　ダリオ・フォーの演劇活動年譜、舞台写真、舞台美術スケッチ、舞台衣装スケッチ、公演ポスターなど計三〇点

ダリオ・フォー舞台写真＆舞台美術展

フォーによる『開かれたカップル』のポスター用デッサン（写真提供CTFR）

展示された写真パネルは、フォーの劇団CTFRより提供されたCD-Rom素材をもとに、デザイン学部生産造形学科の佐井国夫助教授が中心となって製作した。また、展示設営にあたっては、本学学生の協力を得た。

展示に取り上げられた舞台作品は五〇年代から九〇年代までの主要なもので、高田がその選定を行なった。作品のタイトル及びイタリアにおける初演年は以下の通りである。

『泥棒もたまには役に立つ』『消える死体と服を脱ぐ女』（五八年）、『裸の男と燕尾服の男』（五八年）、『天使たちはピンボールをしない』（五九年）[8]、『ミステーロ・ブッフォ』（六九年）、『アナーキストの事故死』（七〇年）、『払えない、払わない！』（七四年）[9]、『ママのマリファナは最高』（七六年）、『クラクションを吹き鳴らせ』（八一年）、『開かれたカップル』（八三年）、『ハーレクィン、ハーレクィン』（八五年）、『ジョアン・パダンのアメリカ発見』（九一年）、『セビリアの理髪師』（九二年）。

このような形でフォーの活動の全体像を紹介するのは、もちろん日本で初めての試みであった。なお、製作された写真パネルは、東京公演の期間中にシアターXにおいても展示された。

次に、演技ワークショップは、ミラノ在住の演出家で今回の舞台の演出を担当した井田邦明氏を講師として行なわれた。その概要は以下の通りである。

平成十三年度
二〇〇一年九月二九日（土）、本学講堂における舞台公演の当日、上演に先立って行なわれた。

平成十四年度
日時　二〇〇二年一〇月四日（金）午後二時三〇分から午後八時まで
場所　静岡文化芸術大学体育館

平成十三年度のワークショップは、舞台上演に先立ってイタリアの演技の特徴を紹介する目的で行なわれた。イタリア伝統の仮面即興劇コンメディア・デッラルテのマスクを実際に用いてイタリア独自の演技の方法を観客に示したが、時間的な制約もあって本格的な参加型のワークショップとしては物足りない感があった(12)。

そこで、平成十四年度には舞台公演とは別に時間を取り、場所も演技のトレーニングのため十分なスペースの取れる体育館に移して行なった。また、対象は演劇関係者に限定し、浜松地域で活動する劇団の俳優、及び本学学生と地域の高校の演劇部員とした。ワークショップは学生対象の部と俳優対象の部の二部に分けて実施されたが、参加者の内訳は学生二四名、俳優二三名だった。また、俳優の部には浜松のブラジル人劇団主宰者ジルソン・サントス氏も参加した。ワークショップでは、体育館の広いスペースを利用して本格的な演技と表現のための種々の身体トレーニングを行なうことができた。ミラノで長年にわたって演劇学校を主宰する井田氏が独自に開発した俳優養成のためのメソッドを用いたもので、参加者にとっては新鮮で刺激的な内容となった。

四　研究の成果

本研究事業の成果として、まず何よりもフォーの代表作とされながらこれまで日本で上演されていなかった『アナーキスト・・・』を翻訳上演したこと、またやはりあまり知られていない五〇年代の喜劇を上演したことが挙げられる。さらには、写真パネル展によって、長年にわたるフォーの演劇活動の全体像を紹介した点にも大きな意義があった。さらには、演技ワークショップによってイタリア演劇の独自性とその魅力を広く知ってもらえたものと考える。

しかも、こうした試みを浜松にある本学で実現し、地域の人々に広く理解してもらえたことにも大きな意味がある。平成十三年度、十四年度ともに講堂での舞台公演には大勢の観客が来場し、盛況のうちに幕を閉じることができた。また、ワークショップを通じて、地域の劇団や高校の演劇部との直接的な交流が行なわれたことも重要である。実際、近い将来に何らかの形で地元の演劇人との共同プロジェクトを立ち上げようとの提案もなされた。

最後に、平成十三年度の事業が「日本におけるイタリア２００１」の催しの一環として行なわれたことを述べておく。この結果、本学がイタリア年の文化事業に貢献するとともに、同時にそれによってイタリア大使館、イタリア文化会館など関係機関に本学の存在を知らしめる結果となった。首都圏あるいは関西圏以外に位置する大学として、この種の催しを通じて全国的にその存在を知ってもらうことは、大学の活動に関する広報の点で大きな効果を上げると考えられる。

注

(1) フォーのノーベル賞受賞の際、日本ではイタリア演劇の専門家以外にはほとんど彼の名は知られていなかった。当時のメディアの報道ぶりについては、一九九七年十月一六日付朝日新聞夕刊「『どんな人？』続くノーベル文学賞」などを参照。

(2) ここには筆者が知り得る範囲のもののみを挙げた。また、九八年の世田谷パブリックシアターにおける上演は、ドラマ・リーディングの形式で行なわれた。

(3) フォーが主宰する劇団ＣＴＦＲでは、彼の作品の海外上演リストを整備しており、作品別・国名別に一覧することができる。詳しい数字は省くが、ここに述べたことはそのリストの数字にもとづいている。

(4) フォーの演劇活動五十周年記念全国巡演については、以下を参照。
高田和文「衰えないフォ（ママ）の風刺精神」、〇二年四月五日付朝日新聞夕刊。
同「ダリオ・フォーの演劇活動五十周年記念公演」、『悲劇喜劇』〇二年七月号。

(5) イタリアでは九〇年代になって、フォーの初期の作品を他の劇団が上演する機会が増えてきた。また、従来フォーは「俳優」としてのイメージが圧倒的に強かったが、近年は劇作家としての側面も注目されつつある。

(6) フォンターナ広場事件の経緯及びゾルジの身柄引き渡し問題については、日本では毎日新聞が特に詳しく報じている（〇〇年四月二三日付、六月一日付など）。

(7) ゾルジの身柄引き渡し問題については日本の国会質問でも取り上げられており、その中で質問者はフォーの手紙に言及している（〇〇年四月二〇日「衆議院決算行政監視委員会第一分科会議事録」）。また、〇一年七月のジェノヴァ・サミット後の小泉総理の内外記者会見でも一人の記者がこの問題に言及している。

(8) ドラマスタジオによる邦訳タイトルは『天使たちがくれた夢は・・・？』

(9) 劇団民藝による邦訳タイトルは『払えないの？　払わないのよ！』

(10) このような形式は、本来は「セミナー」あるいは「レクチャー・デモンストレーション」と呼ぶべきである。「ワークショップ」という語が多用される傾向にあるが、本来は参加型のもののみに用いるべきで、この点は企画の段階で吟味すべきだったと反省する。

追記

今回の事業に共同で参加していただいた扇田先生、佐井先生、伊藤先生、さらに研究事業を承認していただいた木村学長、また舞台公演等の実施に協力していただいた本学事務局ならびに学生スタッフに、この場を借りてお礼を申し上げます。

Research on Italian contemporary theater: jack-in-the-box of Dario Fo 2001・2002

Kazufumi TAKADA

Department of International Culture
Faculty of Cultural Policy and Management

This paper reports on a research project on an Italian contemporary playwright Dario Fo, who won the Nobel Prize in Literature 1997. The project was carried out in 2001 and 2002, and its main purpose was to put on the stage two of his comedies translated into Japanese: "Non tutti i ladri vengono per nuocere" ("The Virtuous Burglar") and "Morte accidentale di un anarchico" ("Accidental Death of an Anarchist"). The former is an one-act play of 1950's, when Fo was still working for the commercial theater, and the latter is one of the most well-known pieces of his political theater written in 1970, following the terrorist attack on a bank in downtown of Milan.

Both plays were presented for the first time in Japan. Along with the stage performances, an exhibition to introduce Dario Fo's activity by photographs, posters and sketches, and a workshop for actors based on typical Italian way of acting was held.